

●コナラが枯れています

あきる野市でも昨年(2023年)から市内全域でナラ枯れが広がっています。カシノナガキクイムシなどの養菌性のキクイムシがマスアタック(集中加害)をすることで夏にコナラが突然紅葉して枯れます。

いわゆる「ナラ枯れ病」と言われている事象です。コナラなどブナ科のドングリの木は萌芽更新する性質があり、薪炭材として太古の昔から利用されてきた樹種で、大径木に育つ前に切って利用されてきました。

●なぜ？

昭和40年代から燃料革命といわれるエネルギーの置換が進み、薪炭利用が急減しました。おかげで、定期的に伐採されていたドングリの木は切られることがなくなり、大きなコナラに育ちました。

ナラ枯れの要因とされる養菌性キクイムシは在来種の甲虫で、昔から日本に生息していました。しかし、マスアタックをするには樹木の体積が大きくなければならないのです。昔は大径木が少なく大量発生することはなかったようです。現在の広葉樹林では、70年以上も切られることなく大きく育ったコナラが沢山あります。

●木がなくなること

植物は空気中の二酸化炭素を吸収して炭素を自身の体内に取り込み、余った酸素を大気に放出してくれています。草本も木本も光合成をする植物は同じように酸素を放出してくれています。残念なことに草本は1年で枯れてその植物遺体が分解する過程で、成長している時に取り込んだ炭素を二酸化炭素として大気に戻してしまいます。しかし、寿命の長い木本類(樹木)は一度、体内に取り込んだ炭素を抱え続けてくれます。さらにその木で家を建てたり、家具を作ったりすれば分解されことなく樹体内に取り込んだ炭素は維持されます。

●地球温暖化と森

このように森は大気中の二酸化炭素を固定してくれます。日本は、国土面積当たりの森林率がOECD加盟国(38か国)中で2位です。日本は森の国です。そのおかげか、地球温暖化の影響は他国と比べて少ないように思われます。

2022年、パキスタンではヒマラヤの氷河の融解や、モンスーンの記録的な降雨により国土の1/3が水没しました。パリ(フランス)では緯度は北海道と同じくらいでエアコンも普及してないところですが、40℃を越す猛暑を連日記録しました。

森を育て続けることで、多少でも地球温暖化に抗うことができると考えます。また、森の恩恵は、他の動植物にも住みやすい環境を提供して、生物多様性が維持されます。



↑ナラ枯れ病で枯れたコナラ

↓トラップで捕殺したカシノナガキクイムシ



●この問題を解決するために・・・

・ドングリ(コナラ)が枯れるのを防ぐ
・二酸化炭素を吸収してくれる樹木を育てる
この2つの課題を解決するための取り組みとして、ボランティアにドングリを集めてもらい、用意した苗畑に蒔いて、コナラの苗を育てました。

野生動物(シカやイノシシ)の被害に遭わないために防獣ネットを張り、育苗を続けています。

植栽と保育を続けて将来的に、100トンの炭素を固定する森を作ることを考えています。

概算で、生きている樹木の重量の1/3が炭素量になります。根～枝先まで含めて重量が3トンの樹木が育てば、そこには1トンの炭素が含まれる計算になります。そのような木が100本育てば、100トンの炭素固定ができることになります。

樹木は1～2年では大きく育ちません、10年単位で先を見ることになります。

今の子供たちが大人になるころに少しでも良い環境を残すことは、今の大人の責任だと考えます。

↓1年育苗した苗の一部をフィールドに植栽

獣害対策と除草対策で小さな区画に防獣ネットを張り、1区画に数本植えて、育てる予定にしています。



↑ドングリの播種後は寒冷紗で保護しました。

↓うまく発芽したドングリ、苗は120本ほどです



↓島状に配置した植栽区画

斜面上部に集中して島状に植える。
将来、成木になり結実したときドングリが下方に転がるように種子散布が行われて実生で増え、森が広がることを考えています。



森を育てましょう。

(杉野)